インターネットの教育利用について
―副センター長職を離れるにあたって―

メディアセンター　副センター長
立教大学社会学部　教授　是永　論

冒頭から私事で恐縮であるが、私が立教大学に赴任してから、来年で二十周年を迎える。そのうちメディアセンターとの関わりは、副センター長としては今年度で五年目であるが、情報企画委員会の委員には赴任してまもなく就任した記憶があるので、立教での履歴とほぼ重なる形となる。

このたび本稿の執筆にあたり、私が本学の「メディアセンター」と初めて出会った、その頃の記憶をたどったところ、当時の「モバイルＶキャンパス」がＮＴＴドコモのＣＭになっていたのを思い出したので、まずその映像を下記リンクからご覧いただきたい。

https://youtu.be/2Ua-G6PUYm8

私が委員に就任した時も、すでにＶキャンパスは実用の段階に入っていたが、ここに出演もされているコミュニティ福祉学部の坂田先生のほか、法学部の荒木先生と委員会で同席し、Ｖキャンパスを創られたレジェンドたちの熱い「スピリット」にわずかながらも触れることができたのは、とても幸いだったように思う。当時は委員会も頻繁に開催されており、かなり細かい動向まで共有していたので、立教ではここまで教育の情報システムについて深く考えられているのかと、当時から感服することしきりであった。

前置きが長くなったが、以上のような経緯から、本稿では「インターネットの教育利用」をテーマに少し考えてみたい。ただし、ごく個人的な体験からの見解であることをあらかじめお断りしておく。

せっかく紹介したので、ＣＭに描かれていた光景を手がかりに考えてみよう。ゼミの席ではなかなか質問が出せない学生も、日頃からネットで情報を共有し、もっと交流を深めて議論する機会があれば、授業自体も活気あるものになる――確かにこのような光景は理想的だと思う。しかしながら、当時よりもはるかにネットが発達し、共有できる情報の量も飛躍的に増えたにもかかわらず、現在においてもなお、この光景は文字通りの「理想」にとどまっているところがある。しかし、こう述べたからといって、現在の本学の情報環境や、それに関わる人々に対して特に不足があると考えているわけではない（ただ、学生にはＣＭくらいに積極的になってもらいたいところはあるのだが）。むしろ、なおこうした理想に向かうためには、ＣＭのような内容では到底尽くすことのできない、考えるべきポイントが他にもあるのではないか、ということだ。以降でそのポイントを少し整理して見ていこう。

1. 教材・資料の共有

この点は、自分としては最も進展を感じている部分で、二年ほど前から授業内での紙での資料配付はほぼ廃止し、学生には情報機器（デバイス）を用意してネットに接続するか、あらかじめ昼休みなどにダウンロードをしておくことで共有することを条件としている。この点で本学は、Wifi 利用が全域利用可能で、共有手段も Blackboard とグーグル・ドライブなど多様な手段の組み合わせにより、動画を含めた豊富な資料が共有できる、非常に充実した環境となっている。論文データベースなどもアクセスが簡単なので、ゼミで使用できる資料の範囲も飛躍的に広がっている。しかし、学生側のデバイスがスマホ一辺倒で、ＰＣも貸し出し以外はまず持参されることが少なく、せっかく入手した資料やデータが後から簡単に取り出せるのだろうかと、こちらが不安になってしまう。オンラインのフォルダもあまり使われていない様子で、ＵＳＢメモリが壊れて、中身のレポートや卒論が危うく「幻の名作」になりかけたという話もまだ珍しくはない。この辺りの選択は、もはや供給側であるセンターの問題を越えているので、利用者側の意識に定着させる手段を学部等で講じる必要があるだろう。

個人的にはクラウドが充実した現在、学生にＰＣを貸与するより、同規格のタブレット購入を一律補助し、利用上のサポートをより充実化する一方、キーボードなどの周辺機器や利用場所を提供した方がコストの点からも合理的ではないかと考えている。

2. 連絡・交流手段

これは教員により個人差が大きいと思われるが、私自身は学生との連絡については、意識的に大学アドレスでのメールに限定をしている。これはまず、メールの利用がスピリットの入口に当たり、他機能の利用のきっかけになると考えていることもあるが、「公式の連絡」という意識を持ってもらうことも教育的な狙いとしてある。ＳＮＳ全盛とはいえ、一般社会ではメールが最も基本的な連絡手段であり、そこでは公的な意味で一定にふさわしい態度が求められるからである。ただ近年は就職活動の影響などもあってか、学生のメールは礼儀作法も含めてしっかりして来ている印象がある。

一方、交流手段については、学生どうしが自主的に民間のＳＮＳを交流手段としているが、それに教員が加わることはどうしても堅苦しさをもたらすので、遠慮しているところがある。ただプライベートなことまでは書かなくとも、研究活動の裏話など、確かにもう少しソフトな形での交流があってもよいと思うし、それでＳＮＳをシェアするのは学生側にも抵抗が大きいと思われるので、大学が提供するＳＮＳの機能がもっと考えられてもよいのかもしれない。もっとも、交流はあくまで課外時間の問題で、教員や学生側の余裕にも関わるものなので(最近の学生はバイトなどで本当に忙しい)、手段や機会の提供だけでは解決しがたいところがあるだろう。

3.　提出物・成績管理

この点は今後予定されているレポート提出の電子管理のほか、百分授業による授業内提出物の増加など、制度的に大きく変わることが予想されるが、現状でも自身で近いことをしているので、参考までに述べておきたい。私の場合、レポート試験については、教務提出（紙媒体）版の完全な写しを Turnitin に提出させることを履修者に義務づけている。この利点は単に剽窃の発見だけではなく、近年データや資料の電子化が大きく進んでいるため、レポートの参考資料をたどることが電子版の場合、リンクによってはるかに容易になることによる。また提出ファイルのダウンロードではなく、画面に直接表示される個別の答案上で採点関係の作業をすることは、現状は紙媒体が正式なために限定的であるが、成績管理の正確さや速さの上でも重要な意味をもつだろう。これに対して、授業コメントなど日常的な提出物に関しては、提出自体は容易になったものの、忙しい中でその管理に費やす時間のコストは非常に高いため、教員だけでは限界が大きい。しかしＴＡ・ＳＡについては雇用時間を基本的に授業時間内としているため、管理を任せられる範囲が相当に限定されるのが現状である。

これは本稿に書くべき内容を外れるかもしれないが、情報化により成績管理の環境が、その複雑さと厳格さを高めている現状で、その作業に関われる人材が学生に限られることは、本来として再考されてもよいのではないだろうか。日頃のメディアセンター業務から、情報管理について質の高い人材が一般社会に豊富であることを感じるにつけ、大学が教員個人の業務管理について学生の雇用を第一の前提としていることは、単に疑問であるだけではなく、情報システムの活用自体にも支障になっているのでは、という想像を禁じ得ない。

以上、説明を簡潔にする分、少し言い方が堅くなってしまったが、ネットの教育利用について考えることを述べてみた。「レジェンド」と比較して、情報利用に対する実績や熱意については及ぶべくもないが、せめてその「スピリット」は今後も受け継ぎながら、本学における教育環境の展開にささやかながらも貢献できることがあればと思う――こう書くのは、今後の組織改編に加え、私が今年度の秋学期から研究休暇により、しばらくこちらの業務を離れるためであるが、たとえ学外にいる時でも、というより、むしろ学外にいる時にこそ、情報システムの真価が発揮されることから、今後も内外でのさまざまな経験を通じて、こうしたテーマへの理解を深めたいと考えている。

最後にこの場を借りて、これまでお世話になったセンターの先生方、職員のみなさま方へ感謝を申し上げます。